

二〇〇五年度

交換留学生体験記(フランス)

経営学部 堀畑 正樹

二〇〇五年度のフランスからの交換留学生はアニエスさんとシェリナさんです。滞在は四ヶ月少々ですが、その間、彼女たちはいろいろなことを体験したようです。週日は日本語、日本の経済と社会、ゼミ、フランス語等の授業に出席し、週末は日本文化の発見に努めていました。彼女たちの言葉を借りれば、「日本での生活は驚きそのものでした。それほど私たちの文化、価値観は異なっています。そしてこの相違は私たちが豊かにするものです」「結論として、日本での滞在から私は多くを学びました。自分で日本を発見し、同時に講義を受けることは、日本の伝統文化と現代文化をしっかりと理解する最良の方法でした」とのことです。彼女たちはデイハイイクや京都旅行、田植えにも参加しています。「そして逆に名城大学の学生がフランスにやって来て、フランスの生活と文化を体験」してほしいと述べています。

七月七日には、経済・経営学会の主催で、恒例となった「交換留学生講演会」が開催され、彼女たちは日本での勉強と国際交流の一環として、滞在中に感じたこと、考えたことを率直に

語っています。彼女たちは日本の何を評価し、何を評価しないのか。私たちには耳の痛いところもありますが、反論―確かにパリやストラスブールなどは国際色豊かではありますが、果たして本当に外国人を自国民と同等の待遇で受け入れているのか、あるいはまたヨーロッパ以外の言語を本気で学ぶ気はあるのか、といった反論―は後回しにして、まずは素直に耳を傾けたいと思います。

ヨーロッパ・フランスの学生から見た日本

アニエス・トレヴァラン



こんにちは！ きょう、この発表会で、みなさんにお会いできて、とてもうれしく思います。わたしはアニエスといいますが、フランスのブルターニュ地方の出身です。わたしはここにいるシェリナと同じようにICN(ナンシー商業学院)で勉強しています。うまくゆけば、この年末に修士号を取得できます。きょう、わたしはフランスの学生から見た日本について、つぎの四つの点をとりあげて、お話しします。

- ① 外見重視
- ② 社会における障害者の場
- ③ 環境
- ④ 外国文化と外国人の受け入れ

1 外見重視

「日本」―日本の若い女性たちは、地下鉄やレストラン、教室などの公共の場で化粧するのをためらいません。若い男性も外見によく注意を払います。髪をとかし、バッグと服を合わせたります。

「フランス」―フランスの若い男性の服装は非常に古典的でラフなものです。彼らの大部分はそれほど外見に注意を払いません。

フランスでは人前で化粧することはとても悪く見られます。とりわけ公共の場、なかでも学校では許されません。実際、ヨーロッパの国で、外見を重視していることを見せると、それは皮相さのしるしか知性の欠如と受け取られてしまいます。もちろん、ヨーロッパ人も外見に注意を払いますが、人前では決してしないし、する場合たいていは自然さを出すためにします。

2 社会における障害者の場

「日本」―日本では障害者のための設備がなされています。トイレ、エレベーター、ブラットフォーム等々。特に視覚障害者用に、横断歩道には音の出る信号があり、地下鉄などには点字があります。このように日本では障害者用のインフラ整備が進んでいます。

「フランス」―障害者用のインフラ整備は、最近の新しい公共の場所は別にして、非常に限られています。いまフランスで議論になっている問題の一つは、就職の採用候補者が障害者であることが判明したときの雇用上の差別です。企業は健常者を優先します。多くの企業は一定のパーセンテージ、障害者の採用

を義務づけられているにもかかわらず、ルールを守らないのです。この問題では、フランスは日本に学ぶべきことがたくさんあります。

3 環境

「日本」―日本の街路、地下鉄、そしてたいいの公共の場所はきれいです。それにごみの分別とリサイクルで日本は非常に進んでいます。

反面、私たちがとてもショックを受けたのは、日本の風景や自然（とくに河川や河岸）が、コンクリートのために台無しにされていることです。コンクリートは非常に見た目が悪いうえに、環境への配慮に欠けます。

「フランス」―フランスの通りは汚れています。紙屑や廃棄物がごみ箱ではなく、道のあちこちに捨てられています。犬の糞はいたるところにあります。リサイクルや住民の意識改革はまだ始まったばかりで、これからです。

反面、フランスには環境の保護に関する重要なルールがあります。私たちは好き勝手なところに建物を造ることはできないのです。環境保護のために建設が厳しく禁止されている場所や、数多くの規制が敷かれている場所があります。また、私たちは好き勝手なものを建てることもできません。その地域の調和を守るために、一定の基準（色、大きさ、材質……）をクリアしないといけません。

4 外国文化と外国人の受け入れ

「日本」―私たちが驚いたのは、日本のどこへ行っても英語による情報がないことです。スーパーから地下鉄、レストランから

映画館にいたるまで、英語による情報がほとんどありません。エキスポ愛知でさえ、「万博」であるはずなのに、私たちが入手できる文字情報はすべて日本語です。それに少しの例外を除いて、ガイドは日本語しか話さないのです。

私たちは多くの日本人の英語のレベルの低さに驚きました。とりわけ心配に思われたのは、大学生の英語のレベルの低さです。また町中のあちこちでフランス語を見かけましたが、たいていはフランス語としては意味不明です。

他方、今度は良い面ですが、外国人としての私たちに對する日本人の接し方に驚かされました。大学から伏見通りや栄まで、私たちを手助けし、案内してくれる人たちに事欠きません。ある意味で、私たちは何か特別な存在のように感じました。

フランスでは反対に、外国人は興味の対象となるよりは、信用できない人物と見なされることが非常に多いのです。これはとても悲しいことです。

「フランス」——もしあなたがパリに来たら、最初に気づくのは、様々な文化の混在でしょう。アフリカ、南アメリカ、アジア等々世界中から来た人々に出会うことができます。

フランスのスーパーに行ってみてください。商品に関する情報のほとんどすべてが少なくとも二カ国語（仏語と英語）で表示されています。さらに、材料から使用上の注意にいたるまでの多くの情報が、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、アラビア語、中国語、日本語、その他で記されています。

大学は学生に外国に行くように奨励しています。ヨーロッパには「エラスムス」という制度があつて、これによりヨーロッパ

の学生は一年間ヨーロッパあるいはその他の地域の大学に行くことができるのです。

かなりのフランス人は英語を話すことができます。高等教育を受けた人はすべて英語を話します。それに加えて、地方分権主義のおかげで、多くの人々が第二外国語を話せます。フランス東部ではドイツ語、南西部ではスペイン語といった具合です。反面、異文化や外国人の混在は同化問題を引き起こします。

毎週新聞は異民族間のもめごとや人種差別問題を報じています。外国人の受け入れはフランスでは非常に重要な問題です。教育を受けてない人々の間だけではなく、教育を受けた人々の間でも、人種差別が存在しているからです。ジャン＝マリールペン率いる国民戦線の人気がこのことをよく物語っています。

以上で、私の発表を終わります。ご質問やご意見があれば、お受けします。（以下省略）



フランスと日本の相違点

シエリナ・カリデー



この発表で、私はフランスと日本で大きく異なる重要な三つの点についてお話しします。これら三つの点は私たちのパーソナリティと言動の違いの元になっているのではないかと思います。その三つとは、世界に開かれていること、社会運動、そして私たち一人一人の視点の表明です。

1 国際都市パリ

フランスは多くの隣国—イギリス・ドイツ・ベルギー・ルクセンベルグ・スイス・オーストリア・イタリア・スペイン—に囲まれた小さな国です。破壊的な戦争を何度も繰り返し、その後、これらの国々は対外貿易に基づく平和的な関係を築くことを決断しました。その結果、お互いに非常に依存しあうようになりました。子供たちが学校で少なくとも二つのヨーロッパの言語を学ぶのはそのためです。英語は必修で、ドイツ語とスペイン語は最もよく学ばれている第二外国語です。英語を話すことは、フランスではキャリアを積むには不可欠ですし、最も教育を受けた人たちは英語を流暢に話さなければなりません。すなわち、大学生、教員、管理職、知識人などです。私たちは日本人の英語のレベルが非常に低いことがわかって驚きました。とりわけ大学においてです。英語は世界中どこでも非常に

流布している言語だからです。

フランスにはまた植民地の歴史があります。そして植民地のいくつかは本土の県と同じ資格をもつフランスの県になりました。これらは「ドム・トム」とよばれる海外県、海外領土です。そのようなわけで、フランス語はフランス人だけが話しているわけではないのです。フランス語はケベック州やセネガル、あるいはベルギーの母国語になりました。また、アルジェリアやモロッコでは、学校でいかなる科目を教える場合にも使用される公用言語です。アルジェリア人やモロッコ人はみんなアラビア語とフランス語のバイリンガルです。

そのような事情で、パリは世界に開かれ、きわめて国際色豊かな都市になりました。というのもパリに住む人々は世界中いたるところから来ているからです。アジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ大陸が色濃く反映されています。いつか、あなたがパリを歩く機会があれば、外国のお店やレストランで、あるいは単に通りを行く人々をながめるだけでも、世界のさまざまな地域の多くのものを発見できるでしょう。このさまざまな文化のまざりあう様を観察するのは、とても楽しいことです！東京へ行ってみて私が驚いたのは、日本の首都はパリ、ロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコほどインターナショナルではないということです。とはいえ、東京はとても大きく、非常に魅力的な都市ではありますが。

2 フランスにおけるストライキと社会運動

フランスにはストライキと社会運動の根強い伝統文化があります。とりわけ公共部門においてそうなのです。この文化は劣

働者と経営者の間での長い闘争の歴史から来ています。ドイツの経済学者マルクスの理論の影響をうけて、ストライキ権は一八六四年に労働者が勝ち取ったものであり、組合は一八八四年に認可されました。今日、組合が強い力をもっているのは、このような歴史をもつためです。

公共部門で、鉄道や地下鉄の運転手が、賃上げや労働時間の短縮といった要求を政府に受け入れさせるために、ストライキに入ることがたびたびあります。このようにして彼らは国の経済活動を何日間も止めることができます！そしてさらにもっと政府にプレッシャーをかけるために、国にとつて最も重要な時期を狙うのが一般的です。たとえば、エール・フランスのスタッフは、フランスで行なわれた一九九八年のワールドカップ開催中にストライキを打ったのです。今年は、年金制度を守るために、公務員はパリでストライキと大規模なデモを行ないました。しかもその日は二〇一二年のオリンピック開催地をきめるオリンピック委員会の訪問を受ける日だったのです。不幸にも、このストのまさききに犠牲者となったのは民間部門の労働者と若い請負業者たちでした。

今日、スト権は乱用されています。そのため世論の支持を背景に、政治家たちはこのスト権を制限して、国全体に害となるような乱用を防ぐ方策を探っています。

反面、この社会運動の文化には、非常にポジティブな側面があります。事実、フランス国民はストに最上の表現手段、最も単純で、最も直接的な表現手段を見出しているのです。この種の行動が私たちの歴史において社会の大きな前進を可能にした

のです。なかでも労働条件の改善や女性の投票権はその賜物です。

フランス人は世界あるいは国内にショッキングな問題が生じたとき、街頭に出ます。たとえば、イラク戦争やフランス国内で極右政党の危険な躍進が大規模なデモを生みました。

フランス人はまた、よろこびを表すためにも街頭に降ります。一九九八年のワールドカップでフランス・チームが勝利をおさめたときや、先月イラクで人質になっていたジャーナリストが解放されたとき、フランス国民は街頭に集結したのです。

3 フランス人は論争やディスカッションが好きです

フランスはラテン民族の国であり、そのせいかな、人々は何でもかんでもしゃべるのが好きで、たいていはたいしたこと言わなくてもいいのにしゃべります。日本語とフランス語のちがいが、日本とフランスの文化のちがいをよく表しています。日本語はおおくのことを言うのに少しの言葉で十分なのです。フランス語は簡単なことを言うにも長い文、無用な言葉を使わなければならないのです。そのうえ、フランス人は天気やニュースにコメントをつけるのが好きで、知らない人であっても会話をはじめるのです。

フランス人はしゃべるのが好きなので、彼らはまた大きな問題について議論するのが好きなのです。たとえば、欧州憲法や国の経済とか、議会で採決されたばかりの法案とかについてです。たとえその問題についてかならずしも多くを知らなくても、フランス人はとにかくその問題について意見を述べるのです。彼らは自分が正しいと説得するために、持てるエネルギー

をすべて使って論拠を並べたてるのです。友たちの間での議論も活発ですが、テレビで流される政治家たちの議論はさらにエネルギーギッシユです！ 時には、政治家は同じ意見のときでさえ激しく言い争いをします。彼らはあくまで自分の意見を言おうとするので、全真同時にしゃべることもありません。司会者が黙るように言うまでしゃべります。

要するに、フランス人はある問題について何も知らなくても意見を言います。逆に日本人はその問題について多くのことを知っていたとしても自分の見解を述べないのです。このことも私たちにとつて驚きです。とりわけ大学においてです。フランスでは学生は発言し、自らの知識と批判精神を見せることによつてほかの人とは一線を画するように促されます。日本で優先されるのは集団の効率性であり、となりの人より大声でしゃべってみても何の役にも立たないのです。これはまさにフランスとは正反対のタイプのマネージメントといえるでしょう！



2005年7月7日開催交換留学生講演会の後のパーティ